

## 『大和物語』の〈歌ことば〉

— 一四九段「この水、熱湯にたぎりぬれば」をめぐって—

亀田夕佳

## はじめに

『大和物語』は「歌」を中心に据えた物語であるにもかかわらず、肝心の「歌」や「歌ことば」については従来あまり考察がなされていない作品である。その理由の一つに、作品の登場人物は実在の人物が多く、実際の史実との関係などに関心が集中したことが挙げられる。

また、作品を通して統一した主人公を持たず、場面に応じてさまざまな人物が登場することから、「昔男」という一人の男君を中心に物語が構成されている『伊勢物語』に比して「未熟」であり、物語の原初的な形態を留めた作品であるとされている<sup>1</sup>。

『大和物語』には、『伊勢物語』に見られるような規範的な言葉の世界とは相容れない要素が多く抱え込まれており、そのことが「未熟だ」との理解を裏付けたとも考えられる。

そうした研究状況を踏まえて、伊藤一男氏は『大和物語』の特異性について次のように指摘している。

『大和物語』の言語表現には、少々特殊かと思えるような面が多い。特殊な言い回しをよしとし、歌のことばと地の文のことばを、ことばという点において関連づける、また、歌のことばを物語的潤色によりふくらませ、興味深い話に仕立てる。このようにことばに対するのは、ことばの情動的な側面ではなく機智的な側面への強い興味に裏打ちされてのことであろう。<sup>2</sup>

氏が「少々特殊かと思えるような面が多い」と指摘する通り、『大和物語』の言葉遣いは、どこかバランスの悪い部分がある。今回取り上げる「この水、熱湯にたぎりぬれば」という表現も、物語の文脈にあって、何やらいびつな「不協和音」といった趣がある。

本論は、そうした荒唐無稽さについて「歌ことば」のあり方に照らし、伊藤氏の指摘する「機智的な側面への強い興味」の構造を具体的に解明し、従来指摘されているような「未熟な」表現であるのかについて考える一助としたい。

## 1、百四十九段「熱湯にたぎりぬれば」の独自性

『大和物語』百四十九段には、『伊勢物語』二十三段、および『古今和歌集』の左註と重複する箇所を有するが、独自の部分から『大和物語』が達成した表現のあり方を知ることができる。まずは、『大和物語』百四十九段から引用する。

むかし、大和の国、葛城の郡にすむ男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら、妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、いけばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。かくにぎははしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけれど、さらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にはかぎりなくねたく心憂く思ふを、しのぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「いね」といひければ、わがかく歩きするをねたまで、ことわざするにやあらむ。さるわざせずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。

さて、いでていくと見えて、前裁の中にかくれて、男や来ると、見れば、はしにいゐて、つきのいといみじうおもしろきに、かしらかいけずりなどしてをり、夜ふくるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、「人待

つなめり」と見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。

風ふけば沖つしらなみたつた山夜半には君がひとりこゆらむ

とよみければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、(a) いと悲しうなりぬ。この今の妻の家は、龍田山をこえていく道になむありける。(b) かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きてふして、(c) かなまりに水をいれて、胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、(d) なほ見る。されば(e) この水、熱湯にたぎりぬれば湯ふてつ。(f) また水を入れる。(g) 見るにいと悲しくて、走り出でて、「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」といひて、かき抱きてなむ寝にける。(三八二頁<sup>3</sup>)

葛城の郡というところに、互いに思い合って共に住んでいた男女がいたが、女の暮らし向きが悪くなり、男は他に妻を持つことになった。当時は男性の衣装など、生活全般についてのことがらは、女性側の経済力で支援するのが常だったためであるが、そんな男の振る舞いに対して、女は責めることをせず、自分の気持ちを押し殺して、新しい妻のもとへと通う男を送り出すのだった。

だが、あまりに従順な女の態度から、男は自分の他に通わせている男がいるのではないかと疑いを持ち、ある夜、新しい妻のもとに向かうふりをして、庭の植え込みに潜んで様子を伺うことにした。すると女は、男を見送った後、夜が更けるまで外の月をながめながら、「風吹けば・・・」と男を案ずる歌を詠むのだった。

この和歌から後の部分について、『伊勢物語』二十三段では、次のようになっている。

風ふけば沖つしらなみたつた山夜半には君がひとりこゆらむ

とよみけるを聞きて、(h) かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。  
(一三七頁)

女が男の心を取り戻す要因について、『伊勢物語』では傍線部(h)「かぎりなくかなしと思ひて」とあり、「歌」そのものに重きが置かれるのに対して、『大和物語』では、歌についての感想は傍線部(a)「いと悲しうなりぬ」と、同じ「かなし」という心情が示されているが、留まるに至った直接的な理由としては、(c)～(f)「女が鏡を胸に当て、水を熱湯に変えたこと」を話題の中心に据えている。

「風吹けば」の歌は、『古今和歌集』雑歌下にも取られているが、歌の背景を説明した左註には「熱湯」の件はみられない<sup>4</sup>。即ち「熱湯」の話題は、『大和物語』独自のものだといえるのである。

そして、『大和物語』では、その独自の話題について、念入りな描き方を用いて強調している。

傍線部(e)「熱湯にたぎりぬれば湯ふてつ」と一度湯を捨てさせ、再び傍線部(f)「水を入れる」と繰り返し語る口調から、この場面の力点は「胸に当たった水が熱湯になってしまった」点にあると考えられる。

歌を聞いた直後の男の反応が『伊勢物語』と同じく「かなし」と表現されていることは先に述べたが、「かなし」の語は、最終的に男が女のもとへと帰る際にも、傍線部(g)「見るにいとかなしくて」と再び用いられており、女の姿を「見る」行為が、女のもとへに留まることを決定付けたことがわかる。

物語はそうした男の姿について、傍線(b)「かくてなほ見をりければ」、(d)「なほ見る」、(g)「見るにいとかなしくて」と、「見る」行為を繰り返し語り、さながら「凝視」ともいうべき時間とまなざしの向こう側に『大和物語』独自の世界である「水が熱湯に変わるさま」を焦点化させているのである。

前裁に隠れ、ひそかに女の様子を見つめるうちに、目をそらすことができな

い心持ちになってしまう男を描き、そのまなざしを読む側に迫体験させるような手法で、独自の世界を印象的に浮かび上がらせた場面だといえるだろう。

では次に、こうした独特の表現について、従来どのように捉えられてきたのか、研究の現在に照らして確認するとともに、問題の所在を明らかにしておく。

## 2、「熱湯にたぎりぬれば」の評価—研究史的位置づけ

『大和物語』独自の部分は、女が「うち泣きて」水を入れた鉢を胸に当てていると熱湯になったという話がみられる。即物的に考えると実現不可能なことがらに思われるが、従来の研究史においても、その点を取り上げて指摘がなされてきている。

現実には起こりえない現象は、「ただストーリーをおもしろおかしく語ろうとする態度<sup>5</sup>」とされ、『伊勢物語』には見られない「叙情性の欠如」として、『伊勢物語』よりも一段低いところに『大和物語』を位置づける理解を導くに至っている。だが、そこにこそ、この作品の滋味があるのではないか。

こうした一見ありえないような出来事を、「説話」の文脈に位置づけたのは、山岡敬和氏である。氏は「龍田山説話」としてこの段を捉え、「非日常性」が説話に必要なことを述べた上で次のように指摘する。

本の妻の嫉妬心によって水が沸騰するという荒唐無稽なでき事は、『大和物語』がこの話を説話へと変えるために生み出した独自の表現ということである。〈中略〉『大和物語』に収載されている歌の多くが知的な面白さを求めている点も、その「説話性」に繋がってゆくのである。<sup>6</sup>

説話、歌物語といったジャンルに関わる用語認定について、今は確固とした見解を述べることができないが、「荒唐無稽なでき事」が「知的な面白さ」に通じるという、山岡氏の指摘は首肯すべきものだと思われる。なぜなら「非日

常」は「遊び」の要素と不可分だからである。

問うべきは、そうした「荒唐無稽」な独自性が、どのような表現構造を有するのかだろう。「知的な面白さ」の由来はどこにあるのか。繰り返しになるが、このことについて、本論は一足飛びに「説話」と連続させて考えるのではなく、「歌物語」であるところに留まり、「歌ことば」のあり方を通して考えてみたいのである。

「水が熱湯になる」ことについて、歌ことば的な発想としては、「思ひ」が「火」に通じることが指摘されており、『古典文学大系(旧)大和物語』の補注には、「金椀の湯のごときも、嫉妬の情のはげしさを誇張したものとのみ単純に受け取るべきでなく、むしろ、「胸の思ひ」を「火」に取り做る、当時の最もありふれた和歌的連想による虚構と見た方がよいであろう。<sup>7</sup>」としていた。「和歌的連想」を踏まえたところは、今井源衛氏による次の言及がある。

胸の思ひで椀の水がたぎるという着想も、こうした歌語としての用法に馴染んでいた人々にとっては必ずしも、それほど奇矯不趣味なものとも思われなかったであろう。<sup>8</sup>

当時の「和歌的連想」を踏まえたところで考えるべきだとする点は示唆的であり、従いたい。しかし、椀の中の水が熱湯に変わるという出来事について、「奇矯」でないとはいえないだろう。胸に当てた水が熱湯に変わるというのは、やはり不自然だ。問うべきは、独自の表現がどのような言葉の論理を素地に形成されているのか、という「レトリックのあり方」なのではないだろうか。

また、従来、水が沸騰する様については「嫉妬の激しさの表れ」と理解されることが多く、自分を捨て後妻を迎えた夫を呪い、丑の刻参りに至る女の執念をえがいた謡曲「鉄輪」にまでつながってゆく「一途な愛の執着のはげしさを示すものである。<sup>9</sup>」という捉え方まで提示されている。

『新全集』の頭注は「事実としては不自然であるが、気持ちを説明するための比喩表現として使われた」とするが、荒唐無稽な内容が何を基盤にどのような表現で成り立っているか、このことを理解した上で、はじめて心情の理解が可能になるはずである。

そこで注目したいのは、「涙が湧く／沸いてあたたまる」という〈歌ことば〉の発想である。先にも述べたが、従来の『大和物語』研究は、専ら実在の人物や事件などとの考証学的研究を充実させてきているが、「歌ことば」を中心に据えたところで、この作品の表現を明らかにしたい。

### 3、涙／思ひ／湧く／沸かす—〈歌ことば〉の発想

「思ひ」を「火」として捉えることが一般的な発想としてあったことは先に少し触れたが、ここで注目したいのは、その「おも火」は「涙」を温めるものだという発想があったことである。いくつか例を示そう。

(A) 人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

(『後撰集』、恋一、五四六、伊勢)

(B) 雨の脚同じやうにて、火ともすほどにもなりぬ。南面にこのごろ来る人あり。足音すれば、「さにぞあなる。あはれ、をかしく来たるは」と、わきたぎる心をばかたはらにおきて、うち言へば、年ごろ見知りたる人、向かひみて、「あはれ、これにまさりたる雨風にもいにしへは、人の障りたまはざめりしものを」と言ふにつけてもぞ、うちこぼるる涙のあつくてかかるに、おぼゆるやう、

思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかすものにぎりける

(『蜻蛉日記』、中巻、二一五頁)

(C) 平中納言よりも、

わき出づる涙の川はたぎりつつ恋ひ死ぬべくも思ほゆるかな

(『宇津保物語』、嵯峨の院、①三〇一頁)

(A) は、『後撰集』から的一首だが、同じ歌は『伊勢集』、『古今和歌六帖』にも採録されており、人口に膾炙していたものであらうと思われる。恋しさのあまり流す「涙」を春の「雪解け水」にたとえ、「ぬるむ」理由を心の中の「おもひ」が「わかす」ためだとしている。涙がとめどなく「湧く」ことに、「思ひ」の「火」によって「沸く」ことを重ねており、「涙は心の思ひによって温められるものだ」という発想を認めることができる。この歌は「火／沸かす」という言葉の論理を背景にしたものだといえる。

同様に(B)『蜻蛉日記』は、天禄元年十二月、年の暮れを前にして、兼家の訪れが遠のく一方である作者が、ある雨の夜、同居している妹のもとに恋人が通ってくる足音を聞く。そこで往時には雨などものともせずに通ってきた兼家を思い出すのだが、同時に今との境遇の違いを突きつけられ、涙を流すという場面である。「ほむら」とは「炎」のことであるが、胸のうちに「思ひ」が一層強まったことをいう<sup>10</sup>。思わず流した「涙のあつくてかかる」さまに、改めて自らの内なる「思ひ」を実感するのである。「涙をわかす」には、恋しい人を思い、「涙が湧いて溢れ出てくる」ことと「炎によって熱く沸く」ことが掛詞として用いられている。

「湧く／沸く」の掛詞は、(C)『宇津保物語』においても、平中納言からあて宮に贈った歌中に、「恋ひ死ぬ」までもの強い思いの喩えとして「涙の川」が「湧き出づる」に「沸き出づる」を重ねた言葉遣いから伺うことができた。

ここまで、(A)～(C)を挙げ、心の中の強い「思ひ」によって涙が「湧く」のであり、同時にその温かさは「おも火」によって「沸く」ことからきているという「歌ことば」の発想があったことを確かめた。「思ひ」が「火」に通じ、

「涙」を「湧かし」、その言葉から「沸かす」という言葉が呼び込まれるという、「歌ことば」の論理があることを述べてきたわけだが、「思ひ」が「涙」を「わかす」ためには、もう一点重要な要素が必要だと考えられる。それは、「思ひ」が「湧く」という側面である。

- (D) ～ ふつつならべる かりかはの 水の流れて ゆくままに  
うづわきかへる 思ひせば わたりがてにも あらましを ～  
(『忠岑集』、八七)

- (E) 藤侍従、御前のわたりに立ち寄りて、孫王の君にも言ひなどする  
に、湧き出でたる水を見て、  
「河べなる石の思ひの消えねばや岩の中より水の湧くらむ  
たびしかはらもといふとても」孫王の君のいらへ、  
底を浅み石間を分けて行く水はわくと見れどもぬるまざりけり  
(『宇津保物語』、祭の使、③四七二～四七三頁)

(D)『忠岑集』の「うづわきかへる」は、川の流れによって水面に渦が生じるさまを、「湧く」といったものであろう。その「わきかへる」が続いて「おもひ」を導くことによって、「思ひが湧く」の意を連続して響かせることになるのである。渡ることをためらうほどに激しく波立ち、渦が「湧きかへる」ことに、自らの「思ひ」がおさえようもなく「湧きかへる」状況が等しいものとして捉えられているのである。同様の発想は、(E)においても、水が「沸く」ように見えるさまに、思ひの「火」を結びつけ、「水が湧く」ことと「思ひが湧く」ことを重ねる論理に見出すことができる。

そして、こうした発想を一段強調したものとして次の(F)がある。

(F) 「ところせげならむ恋の歌、ふたつばかりよみて得させよ」と人の言

ひしかば

かまどやま〔 〕かしまとすればもゆるもくるし心づくしに

つきもせず恋に涙をわかすかなこや七栗の出湯なるらむ

(『相模集』、一三七～一三八)

上の一三八番歌については「地名の語感のおもしろさを用い、大げさに恋の苦しみ悲しみを詠んでいるので、実感に乏しいのは当然である」<sup>11</sup>と評されている。「ところせげ」とは「大げさで仰々しい」の意であるが、涙が「ぬるむ」程度ではなく、七栗の「湯」になるとしたところが「ところせげ」な詠みぶりとなされたのだと考えられる。

以上、『大和物語』独自の表現基盤を問うために、「涙／思ひ／湧く／沸かす」といった「歌ことば」の様相をたどってきた。相手を思う心が「湧き」、抑えようも無く溢れてくるように、涙が「湧き」、その涙は心の「思ひ」という「火」によって熱く「沸く」ものだという認識があった。したがって、『相模集』でみられたような「涙」が「湯」になるという詠みぶりは、そうした「歌ことば」の論理を一段と過剰にしたものだったといえるが、『大和物語』では、それが「湯」の段階を通り越して「熱湯」にまでなっている。ここにこの物語が独自に成しえた過激なアレンジを認めることができよう。

即ち、『大和物語』の「この水、熱湯にたぎりぬれば」は、『後撰集』にあるような「涙が沸いてあたたまる」という、一般的な〈歌ことば〉の発想を基盤としながら、そこに一層レトリックを施した、いわば「奇をてらった表現」なのだといえる。

#### 4、「熱湯にたぎりぬれば」の解釈

さて、一四九段にみられた「この水、熱湯にたぎりぬれば」について、「歌ことば」の発想を基盤にした表現であることを述べた。「思ひ」が「涙」を「沸かす」場合、同時に「思ひが湧く」ことが見据えられており、ここに描かれたのは男を慕う女の強い気持ちであったのだといえるだろう。したがって従来読み取られているような、相手を追い詰め、攻撃するような嫉妬や怨念を真っ先に読みとることはできないのである。

また、男が心を動かされたのは、女が胸に腕を据えたのを見たためでもあったが、女は何故そのような行為をせねばならなかったのか。このことについて、北村季吟は「水にて胸のほのを、さますさま也」と指摘していた<sup>12</sup>。即ち、ひたすら自らの心を鎮めるためであったとするものだが、ここにも「歌ことば」の発想を見ることができる。

涙にも思ひの消ゆるものならばいとかく胸はこがさざらまし

(『後撰集』、恋二、つらゆき、六四四)

さはごとくに浮かぶ蜃はなになれや水におも火はきえずやあるらむ

(『大齋院前御集』、一三五)

女が腕を胸に据えた理由、それは「胸のほむら」を消すためであったろう。自分を捨て、新たな女の許へと男はたつた山を越えていった。残された女は、せめてもの思いで男に対する「思ひ」を消そうとしたのではなかったか。だが、思ひは抑えようもなく湧き上がり、女の思いの強さのままに、水を熱湯に変えてしまった。女の行為は自らの未練を清算するためのものであったと考えられる。胸に水をあて、恋の炎を消そうと努めたのだが、却ってそのことによって男の気持ちを振り向かせたのである。

従ってここでの女は、男を強く想いこそすれ、嫉妬に狂って相手を呪い殺すよ

うな心は持っていない。男が女のもとに帰ったのは、自分を想うけなげな心に打たれたのであり、怨念に凝り固まった女の許に男が帰るという物語ではなかった。

## 5、おわりに

ここまで、『大和物語』の表現が、『古今和歌集』や『伊勢物語』において完成されたスタンダードな〈歌ことば〉の規範を、あえて脱線させ奇をてらった所に独特の面白みを獲得したものであることを述べた。つまり、『大和物語』の表現は、これまで「通説」としていわれてきたような、「未熟」で「素朴」なものばかりだとは言い切れないことになる。

そもそも、「未熟」だとした根拠は、登場人物が雑多で、一人の人生を描ききっていないことにあった。確かに、一人の主人公の「一代記」的なものへと収束させてゆく視点からは、『大和物語』の形態は、はなはだ不安定で未熟なものだと映るのかもしれない。

『大和物語』には、『伊勢物語』や『古今集』の世界をいったん通過しなければ成し遂げられなかった〈歌ことば〉の世界がある。歌ことばというものに慣れ親しんだ人間でなければ味わえないような、成熟した面白さである。本論で取り上げた内容に即していえば「思ひ／おも火」が「湧く／沸く」という歌ことばの世界を逆手にとって、即物的に「可視化」してみせた点がそれにあたる。いわば「遊び心」のなせるわざだったといえるだろう。

「歌がたり」の発見は、形態上の「未熟さ」を積極的に口承文学の世界と連続させえた意味において、また、敗戦後の当時、日本人の希望はどこにあるのかという切実な思いがこめられた読みとりである点においても、非常に重い提言だった。

だが、戦後六十年以上が過ぎ、そうした熱気を冷静に受け止める時代になった今、作品の「ことば」に即した読み取りも、この作品の一側面として指摘したい。さまざまな要素を総合したところで、作品全体の評価がなされるべきだ

ろう。

本論は、大和物語の表現について、〈歌ことば〉のあり方を基点に考察した。

<sup>1</sup> 益田勝実「歌がたりの世界」(『季刊国文』第4号1953年3月、『説話文学と絵巻』三一書房1960年、「物語文学と歌がたり」『体系物語文学史』第1巻有精堂1982年)。

<sup>2</sup> 伊藤一男「『大和物語』の言語感覚」

(『実践女子大学文芸資料研究所 電子叢書I』1999年3月)。

<sup>3</sup> 『伊勢物語』、『大和物語』、『宇津保物語』、『蜻蛉日記』、『源氏物語』の本文は小学館新編日本古典文学全集により、巻数、巻名及び頁数を示した。和歌の引用本文は、新編国歌大観により、歌番号を示した。散文、韻文ともに私に表現を改めた箇所がある。

<sup>4</sup> 左註には次のようにある。

ある人、この歌は、むかしやまとのくになりける人のむすめにある人すみわたりけり、この女おおもなくなりて家もわるくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくにに人をあひしりてかよひつつかれやうにのみなりゆきけり。さりけれどもつらげなるけしきも見えてかふちへいくごとにをとこの心のごとくにしつついだしやりければ、あやしと思ひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまでことをかきならしつうちなげきてこの歌をよみてねにければ、これをききてそれより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

(古今集、雑歌下、よみ人しらず、九九四)

<sup>5</sup> 鑑賞日本古典文学第5巻『伊勢物語大和物語』角川書店。

<sup>6</sup> 山岡敬和「龍田山説話を考える—その2『伊勢物語』・『大和物語』の場合—」

(『国学院雑誌』第102巻第10号、2001年10月)。

<sup>7</sup> 阿部俊子、今井源衛校注『日本古典文学大系 大和物語』(岩波書店1957年)。

<sup>8</sup> 今井源衛『大和物語評釈』(笠間書院、2000年)。

<sup>9</sup> 岡野弘彦「鄙のあはれ」(鑑賞日本古典文学第5巻、『伊勢物語大和物語』、角川書店)。

<sup>10</sup> 『源氏物語』真木柱巻には木工の君詠として次の歌がある。

独りゐてこがるる胸の苦しきにおもひあまれる炎とぞ見し(真木柱③三六八頁)

<sup>11</sup> 竹内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ『私家集全釈叢書12 相模集全釈』

(風間書房、1991年)。

<sup>12</sup> 北村季吟『大和物語拾穂抄』

(吉澤義則編 未刊国文古注釈体系第9冊、帝国教育会出版部、1939年)。